



昭和4年4月身延山81世杉田日布大僧正御親教記念



昭和6年2月寒修行（山門、石垣、手すり、仁王像、掲額などもご覧下さい）



昭和8年4月日蓮大聖人650遠忌・圓頓寺開創300年祭記念、村雲婦人会



昭和8年4月日蓮大聖人650遠忌・圓頓寺開創300年祭記念、天童大衆



昭和26年4月立教開宗700年記念梵鐘再鑄大法要



昭和54年5月青年会主催親善ソフトボール大会



昭和63年2月寒修行参加者



平成元年2月帰山式で親大黒様を抱き山門をくぐる上人

護持会発足後の住職、護持会会長、婦人会会長



吉田 勇
昭和39年～



順境院日攝上人
副住職



順信院日薫上人
33世住職



一妙院日淳上人
32世住職



田原 久
平成13年（代行）



木下正光
平成11年～



早川久五郎
平成5年～



阿蘇品正道
平成2年～



塚本フミ子
平成4年～



芋生アツ
昭和60年～



堀川エツ
昭和53年～



鬼木信次郎
平成14年～



(編集委員長)
谷 良太郎



豊田ハヤ
平成14年～



山下としこ
平成6年～

圓頓寺たより五十号を迎えて

婦人会長 豊田ハヤ



降りつづく春雨の音を耳に、懐かしい十年前の圓頓寺たよりを読みながら、時の流れの速さに今更に感を深くしております。

このたび、圓頓寺たより五十号の発刊を迎え、お喜び申し上げます。

最近めまぐるしい世の中の変わりよう、経済の流れ、それに、青少年の犯罪が多発し、不安が募る日々のなか、お上人より「智」と「知」

のお話を伺い、豊かき、便利さだけを求め続ける現在の社会の警鐘である。と受け取らせていただきました。世の中が平和で暮らしていることを祈っています。

振り返ってみますと、母はよくお題目を唱えており、物心ついたときは日常生活がすべて信行と結びつき、諭してくれていたお題目が心に残っています。思えば母の教えは私の宝ものでした。

私も役所を退職し、兄の薦めで圓頓寺にご縁をいただき、婦人会に入会し、英知上人、坊守様にご指導いただき深く感謝しております。婦人会員として、日蓮大聖人のみ教えとその戒め

を堅く守り、住職上人を助け、共にお寺を護持し、奉仕の浄行をもって、宗徒としての本分を尽くすことを目的とする婦人会の規約を守り、会員として責任を果たす覚悟です。坊守様を中心に婦人会員の皆様もいつもテキパキと働かれ、気さくな方々で、私はそのつど元気をもらっています。また、毎月二十八日の信



初講法要でお給仕する婦人会代表

平成十七年度～平成三十四年度

りっしょうあんこく

立正安国

お題目結縁運動

日蓮宗



信行会会長 木下美枝子

お祝いとご挨拶申し上げます

行会で、皆様と一緒に唱える『お題目』は心が穏やかになってきます。毎月一回読経の後にいただく霊神符を肌身はなさず着帯していただきますので、心丈夫です。ありがたいですよ。

私が忘れることのできない、今は亡き早川総代様、木下総代様にはいつも助けられ、お世話になり、ありがたく御礼申しますと共に、ご冥福をお祈りいたします。

副住職英人上人が、大荒行再行入行を決意されました。百日間の酷寒の中入行です。【5ページ、入行決意のご挨拶をご覧ください】

私たちは、大荒行再行入行が無事に成満し、元気で帰山されるようお祈り申し上げます。

檀信徒の皆様のご指導、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

南無妙法蓮華經

圓頓寺たよりが五十号も続いたこと、敬服いたします。前号及び四十七号などを拝見しますと。創刊号は昭和五十年発行の「圓頓寺のいぶき」で、編集発行人は荒木英知上人、信行会事務局の名前もみられ編集に



寒修行する信行会会員ら

信行会とは？と聞かれましても答えることが出来ま

携わっていたようです。それから四十九号が永々と続き、三年間だけです。人が護持会会長として関わっていたと思うと感激しますとともに、皆様に感謝の気持ちで一杯です。

さて、本年四月圓頓寺護持会総会において、信行会々長を任命されました。

せん。毎月二十八日にお詣りし、俱生霊神のお守りの子供や孫達の方まで受けて着帯させ、私自身肌身離さずお守りいただいているから、おかげ様の毎日をごしております。主人が生前行行に励み、本等を多く読み、書き抜いたりして勉強いたしておりました頃、共に心をひとつにお詣りし教えてもらっていたならば、後悔ばかり度々ですが、死別して始めて心からお題目と共に手を合わせ、ひとつづつ教えていただいている現在の私です。

他事は何事もさておき信仰第一にとめますが、分からないこと、知らないことが多くあります。お上人様から研修等に参加して学ばせていただき、信徒の皆様と共に信行いたしたいと

思います。

本年は、英人上人大荒行に再行されます。十一月の入行から来年二月十日の成満まで、そして帰山式と、信行会が頑張つて動かなく

圓頓寺さまと父

編集委員 大瀬和江



昭和五十八年、公務員を退職した父は、時間的ゆとりと心のゆとりができたのか、よくお寺へ足を向けるようになりました。そのうち、護持会役員(会計)を引き受けて、ますます熱心

ではならない年でもありません。どうぞ皆様、ご指導とご協力をお願いいたし、勤めを果たしたいと思っております。よろしくお願いいたします。

にお寺へ通うようになりました。

その頃信仰深かった祖母は高齢になり、お寺の行事は父母が参加するようになりました。父は、檀信徒会館が建築されている時は、毎日のように現場を見に行くのが楽しみで、私たちから、『じいちゃん現場監督さんね?』と言われるくらい足を運んでいました。そんな父を病魔が襲い、平成二年一月六日に帰らぬ旅へ出てしまいました。退

官後の、五年間の短い期間でしたが、お寺で過ごした日々は充実したものだったと思います。

その当時小学生だった英人^{ひでと}さんが、大荒行を終え立派なお上人になられたこと。この暮れには、二回目の大荒行に入行されること。きつと父も、あの世で喜んでいることだと思います。先日、実家で父のアルバムを見ていたら、二十数年



寒行：左から大瀬さん、英人君、英知上人

前の写真を見つけました。英知上人が三十代で、英人^{ひでと}上人が小学生だったと思います。その当時の寒行の写真でした。当時「圓頓寺たより」を読んでいた父も五十号発刊を喜び、楽しみにしていると思います。

平成五年に、百二歳で祖母が亡くなり、私も誘われるままに、お寺のことは右も左も分からず入会した婦人会で、かれこれ十年の歳月が流れてしまいました。いまだに婦人会一年生です。現在母も高齢になり、脑梗塞の後遺症で、要介護③になって今では、お寺へもお参り出来なくなりました。そんな母の介護をしながら、私も出来る限りご奉仕に努めようと思っております。五十号発刊、おめでとうございませう。

合掌

『圓頓寺たより五十号』を祝して

編集委員 藤川悠子



昭和五十年創刊であります『圓頓寺たより』五十号おめでとうございます。

恵海上人、英知上人、英人上人と三代二十五年間、ただ一度の欠刊もなく永々と続いたことに驚嘆しています。

『圓頓寺たより』をひもといてみますと、圓頓寺の歴史が見えてきますと同時に、携わった方々にも御礼申しあげたいと存じます。

昭和六十三年三月、主人が定年を迎えたため山鹿に帰ってまいりました。帰鹿早々私は自宅新築の夢で一杯でしたが、主人の考えは別で、回向にみえていた英知上人と出会い、心の通い合った尊敬する友人となり、日蓮宗の偉大な教えの中に入り、いつの間にか護持会の会計を仰せつかるようになつていました。

この中には祖父母の時代から、父母へと営々と日蓮宗の信徒として受け継がれた家に入り込んだのか、自然と自分自身の心の中に日蓮宗への思いを募らせていったのではないのでしょうか。英知上人のお人柄、そして当時筆頭総代の早川先生の

よりよきご指導も大いにありました。早川先生の車で、行衣、輪袈裟と経本、筆記用具を持ち、いそいそと本妙寺様に出かけていた姿が今でも目に浮かびます。



平成5年4月住職認証式のおり

平成五年四月十四日、新任職認証式があり母と共に久遠寺様に参詣させていただき、英知上人のご立派な姿に接し涙が出ました。この時のご法衣とご袈裟は、

英知上人のお母様をご寄進されたと聞いております。お母様が一生懸命祈りを込められたのです。

圓頓寺さまとのご縁はといますと、先々代上人ご夫妻が父と母を引き合わせ、ご媒酌の労を取っていただいたと母から聞いて驚きました。その仏縁をいただくことが出来たお蔭で今の私達がいるのです。母は、芋生家に嫁して以来圓頓寺さまとのご縁は深く、婦人会長としても会員の皆様と共に、お寺の発展に力を尽くしたと思います。その後五年間本総代を務め、平成十一年高齢のため辞任いたしました。この時英知上人より『大姉』号を叙され、当山の特別法号位に列させていただきます。本当にありがたいことで私くし

も、今後、誠心よりご報恩に報いたいと念じております。最後に、『圓頓寺たより』

が未来永劫に続く事を確信し、五十号のお祝いを申し上げます。合掌

記念号 文芸

身延山大本堂落慶記念俳句入選作

☆ 大本堂成りて身延の天高し としこ

圓頓寺たより五十号記念俳句

☆ 青き踏む何の迷ひもなき日なり

☆ 水の音どこより涼し谷川原

☆ 甚平に着替きかえ和尚は坪庭へ

☆ 大西瓜冷やし加減の厨くりやばた端

☆ 石川原流れ涼しき音残す

☆ 艾もぐさ燃す施餓鬼供養の善女達

☆ 目を閉じる頬へつたひぬ玉の汗

山下としこ

記念号・副住職特別講座

法華経漢訳千六百年

副住職 荒木英人



お経の本とは？

一般の方々にとつて、お経の本というものは、大多数、色々と縁が薄いものとなつてきているようだ。私自身、日頃の回向祈願の法務を通して、そう感じられる。とはいふものの、常にお寺では、青い表紙の

お御経本安置し、を折々にふれ配布はしている。

ただ、たった一冊のお経の本との出会いであつても、信仰に発心し、弛たゆまない精進により、大きな仏縁を成ずることにもなる。時として想像以上の大変な力に変化する。

そもそも、お経の本というものは、菩提樹の下で悟りを開示された釈尊のお言葉や御事跡そのものを類聚したもののことである。言い換えれば、仏そのもの。信仰における極めて重要なものである。

だが、現在、我々が手にする経文というものは、漢